

巻頭言(触れること、癒されること) ……………	1	NEAR Recommends ……………	12
新任研究員紹介 ……………	2	NEAR短信 ……………	14
回顧と展望 ……………	3	NEARセンター市民研究員の活動一覧 ……………	14
北東アジア最前線 ……………	9		

触れること、癒されること

NEAR センター研究員
渡辺 圭

新型コロナウイルスのおかげで様々なことを考えさせられた。その中でも頭をよぎったのは、コミュニケーションについてである。果たして、オンラインやオンデマンドの授業ですべてが伝わるものなのだろうか。人間の五感には、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚がある。オンラインでは視覚、聴覚が強調される。残りの感覚についてはどうなのだろうか。

NEARセンターの研究員として、2019年にロシアのモスクワに調査旅行に赴いた。当方は、ロシアのキリスト教、つまり、ロシア正教を専門としている。その調査は、ポクロフスキ修道院と呼ばれる宗教施設に安置されている「モスクワの聖マトローナ(1881-1952)」の遺骸を参拝することを眼目としていた。ロシアのキリスト教においては、敬虔なる信仰心を持った人間を「聖人」と称する。それら聖人たちは様々な奇蹟をなし、この俗世と神聖なる世界の媒介者となっている。モスクワの聖マトローナもロシア正教の聖人の一人である。この調査に際して、NEARセンターとゆかりの深いラリーサ・ウスmanoヴァ先生に援助を仰いだ。ラリーサ先生の案内のもとに、モスクワのタガンスカヤという地下鉄の駅から徒歩にて向かった。

地下鉄を上がると、すでに修道院に向かう人流があった。その人たちの流れは、モ

スクワの聖マトローナの遺骸を求めていた。モスクワの聖マトローナのイメージには花が常につきまとう。私とラリーサ先生は聖マトローナに捧げる花を買ったのである。「聖地」という言葉があるが、ポクロフスキ修道院はまさにその言葉が相応しい。ラリーサ先生には敬虔なロシア正教徒の友人がおり、私も大いに助けられた。実際に修道院に着くと、写真撮影は禁止されており、売店で本やパンフレットが買えるのみであった。とにかく、モスクワの聖マトローナの遺骸に少しでも近づきたい、という気持ちが高ぶった。

ラリーサ先生と話しながら、修道院の中でモスクワの聖マトローナを崇敬する信者たちがその遺骸を参拝する列に連いた。聖マトローナは、生まれつきの盲人であり、十代にあっては足が動かなくなったという。しかし、ロシア正教会の教えでは、聖マトローナには「霊の眼」があったのだとされ、その瞳でもって様々な予言をなした。修道院の売店で働いている修道女と話をしていると、聖マトローナの遺骸に触れることが心を癒し、様々な疾病を治すと言われていたことが分かった。聖マトローナに対する信者の接し方は、「キス」である。彼女の身体はガラスに覆われているが、そのガラス越しに「キス」をする。ここで重要なのは、「接触」という宗教的営為である。ここに、

何故聖マトローナの身体を直に見てみたいのか、というロシア正教徒の欲求の答えがある。

実際にラリーサ先生と聖マトローナの遺骸を見たとき、複雑な感情が去来した。私はガラス越しに聖マトローナに「キス」をしたが、果たして自分はそれに値する人間であろうかと。ロシア正教会の教えでは、聖人に「触れる」ことは「癒される」と繋がっている。新型コロナウイルスのもたらしたものは、聖マトローナの遺骸に直

に「触れる」ことではなく、オンラインで、「画面」で関わろうとすることであった。ないものねだりのような物言いになって恐縮だが、ロシア正教会においては「触れること」は「癒されこと」と繋がっていると筆者は考える。オンラインでは伝わるものも伝わらない。イエス・キリストは盲者の眼を開き、脚が萎えた人間を治療した。ことほどさように、キリスト教は治癒のイメージと結びついているのである。

新任研究員紹介

《NEARセンターは、2021年4月より新たに1名の新任研究員を迎えました。中村圭研究員をご紹介します。(編集部)》



NEARセンター研究員 中村 圭

はじめまして、中村圭と申します。関西人です。この4月より新設、国際関係学部国際関係コースに着任しました。そしてこの名門NEARセンターの研究員の一人となりましたことを心より嬉しく思っております。

私は、人材の流動性や多様性が高まるなか、どうすれば地域社会や企業経営も含めてみんなうまく幸せにやっていけるのだろうか？ということずっと考え続けています。これはかつて仕事や休暇などで長期間、世界各地を旅した際に、行く先々で多くの有能なチャイニーズたちに出会ったことがきっかけとなっています。彼ら／彼女らの経済的合理性だけではどうしても説明できない

果敢な国際移動に興味を持ち、30代半ばで立命館大学大学院、国際関係研究科に社会人院生として入学しました。そこで研究の面白さにハマリ、博士課程に進学してから研究に専念し、北京にも2年間（北京語言大学、中国社会科学院経済研究所）留学しました。

具体的には、世界中を流動する中国人人材の頻繁な転職と起業行動とそのマネジメントを研究の対象にしています。中国は、一生涯を同じ組織で過ごしていた社会主義計画経済体制の社会から、改革開放以降のごく短期間で未曾有の経済成長と同時に雇用流動化社会を実現しました。同様の経済の高度成長期に、日本社会では終身雇用制を確立、真逆の道を歩んでいます。その違いはどこにあったのか、頻繁な人材の職業流動を受容している中国企業や社会はどのようなしくみになっているのか、これらの問いについて、さまざまな学問の知見（社会学／経営学／イノベーション論）を応用しながら一冊の本にまとめました。（『なぜ中国企業は人材の流出をプラスに変えられるのか』勁草書房、2019年）。チャイナデイリーは、中国人の1社での平均勤続年数について、1980年代出生者で26.5ヶ月、1990年代出生者では18.5ヶ月と報道しています。拙著で私が研究対象としたのは、現地日系企業を舞台に頻繁に転職を繰り返し、日本向けのファストファッションのアパレル製造貿易にかかわる高度人材です。多くの現地日系企業は、頻繁な転職にかかわる

中国人の行動原理を理解できず、その対応に苦慮しています。拙著では、そのしくみについて、ミクロ（ライフストーリー分析）、メゾ（経営学）、マクロ（東アジア版イエ社会論を援用した比較社会学）の各レベルで解き明かしました。それらについて、徹底して中国人の視点にたち、欧米ではなく中国の社会学理論を援用して分析した研究というものはほぼ存在しなかったために、拙著は、2020年度日本マネジメント学会の学会賞を受賞することができました。

今、日本社会では終身雇用制の維持がもはや困難となり、若年層を中心に雇用流動化が進んでいます。また島根にUターン、I

ターンする人材たちも、その大部分のケースで職業移動がともないます。また中国にルーツを持つ日本在住者は100万人、留学生、訪日観光客数とも最多であり、チャイニーズは日本最大のエスニック・マイノリティ集団となっています。子育て等で仕事を中断せざるをえなかった有能な女性や外国人人材の活用、そして観光や投資促進、多文化共生、ダイバーシティ・マネジメントなどにかんしても、これまでの知見を応用して、地域貢献ができれば、と考えています。現在、島根について猛勉強中です。ぜひご指導ご鞭撻を賜れますよう、どうぞ宜しくお願いいたします。

回顧と展望

(NEARセンター研究員
2020年度研究活動自己点検)

《NEARセンター研究員（2020年度から所属継続）が、過去1年間の研究活動を振り返り、今後の展望を語ります（編集部）》

NEAR 副センター長 石田 徹

2020年度はコロナ禍の影響を大いに受け、国内移動（帰省すら）できない状況だった。況んや研究活動をやで甚大な影響を受けたが、おおよそ以下の通りである。

- ① 当年度より科研費「前近代日朝外交における「訳官使」の全体像の解明」（研究代表）に着手した。韓国や対馬での現地史料調査はまったくできなかったが、急遽国会図書館の遠隔複写サービスなどを用いた史料収集と、ひたすら史料分析に努めた。
- ② 研究分担者として科研費「訳官使と通信使の統合的研究」（研究代表者：池内敏名大教授）で「訳官使・通信使とその周辺研究会」（オンライン・5回）「同サブグループ」（オンライン・3回）に参加するなどした。
- ③ 当年度から研究分担者として「近世・

近代の東アジアにおける『属国』の『併合』に関する比較研究」（研究代表者：岡本隆司京都府大教授）に参加することとなったが、こちらはコロナ禍の影響をまろに受けて、進捗状況はあまり芳しくない。近代日朝関係を中心に研究を進めたい。

- ④ 最終年度となるNIHUプロジェクトは、11月にオンラインワークショップで最終成果物にむけた議論に参加した。
 - ⑤ 論文：「訳官記録書付一覧から考える対馬朝鮮関係」『訳官使・通信使とその周辺』（②の科研費の成果報告書）3号、2021年。
 - ⑥ 口頭発表：「訳官記録書付一覧から考える対馬朝鮮関係」@②科研研究会(10/3)、「『御養君建儲』をめぐる書契問題の検討」@②科研研究会サブグループ(3/27)。
- 2021年度の展望として2点挙げておく。
- ① NIHUプロジェクトでは最終成果物において「対馬と異国船」と題する論稿を提出済みである。
 - ② 科研費（研究代表分・研究分担分）の課題では、史料調査（@対馬・韓国など）が欠かせないのだが、現今のコロナ禍の状況ではそれがままならない。コロナ禍の状況を見極めつつ、善処したい。

NEAR センター長補佐 **ムンフダライ**

2020年度は、主に、「北東アジアにおける言語の共通や類似の現象、その地域的特徴」という課題に取り組んだ。以下、その内容について紹介する。

北東アジアは、言語の多様性に富んだ地域であり、この地域の言語分布については、中国東北部からモンゴル高原を経て、中央アジアに至る地帯では、ツングース諸語、モンゴル諸語、そしてチュルク諸語が広がっている。これらの言語は、互いに共通性や何らかの関係性をもつため、「アルタイ諸言語」という言語集団として扱われる。そして、アルタイ諸言語の分布地帯の南には、漢語（中国語）の世界が広がり、その東には、朝鮮語・韓国語、日本語が広がっていく。

一方、北東アジアは、言語面での共通や類似の現象が具現化している地域でもある。

その一つは、漢字や漢文の伝播により形成した「漢字文化圏」という現象である。漢語（中国語）の特徴によって創出された漢字が、歴史上、地域と言語の「域」を超えて、朝鮮半島と日本に伝わり、それによって、「漢字文化圏」といった、中国、朝鮮半島、日本に跨る文化的に同質な現象が形成されたのである。そして現在も、日本と中国の間で、漢字による言語・文化の交流が続いているのである。

もう一つは、言語類型論上の類似的な現象である。アジア大陸の北部に分布するアルタイ諸言語と典型的に類似する現象が、朝鮮半島と日本列島の言語にまで及ぶのである。だから、言語類型論上、朝鮮語・韓国語、日本語を「アルタイ型言語」として扱うことがある。もちろん、諸言語間の比較・対照を通じて、類型論上の共通点を探る一方、諸言語間の相違点を解明することも重要である。

本研究を通じて得られた認識は、北東アジア地域において、「漢字文化圏」と「アルタイ型言語」といった、言語面での共通や類似の現象が併存しており、それが、この地域における言語面（ないし文化面）での地域的特徴を成している、ということである。

なお、上記研究について、資料調査と考察から得られた認識に基づき、2020年度 NEAR センター市民研究員第1回研究会（2020年12月5日）アカデミック・サロンで、「北東アジアの言語：その地域的特徴について」と題する報告を行った。

NEAR センター研究員 **山本 健三**

本紙第58号（2020年9月）の「回顧と展望」では、2020年度の「目標」として、「2019年度に行った一連の学会報告を論文化すること」を公約したが、何とかその一部を達成できた。同年6月に行ったP・クロボトキン（1845～1921）の東アジアでの思想的影響力に関する報告原稿を修正・加筆し、「二〇世紀初頭の東アジアにおけるクロボトキン主義の拡散—科学主義と道徳性」という論文として『初期社会主義研究』第29号（2021年3月）に発表した。

だが、研究成果の刊行はこの論文だけにとどまり、学術的には残念な年度であった。近年、ロシアの図書館や文書館に出かけては一次史料を読み込む、という研究スタイルを続けていた筆者には、コロナウィルス禍で渡航できない状況はまさに致命的であった。浮いた旅費の大半を書籍購入に回し、例年より多くの学術書を取り寄せることで事態を打開できないものかともがいてみたが、うまくいかなかった。とはいえ、久しぶりにじっくりと研究書や論文を味読できたのも確かである。パンデミックが終息する日はまだ遠そうだが、蓄積した文献をもとに、自由に海外渡航できるその時に備えたい。

ところで昨年度より、筆者が研究分担者として参加している科研費基盤研究(B)「近現代社会運動のグローバルな拡散のメカニズムに関する思想史的研究」〔2020年4月～2024年3月〕（代表：田中ひかる）が始動した。思想や運動の「拡散」を主題とするこの共同研究で筆者は、ロシア革命後の内戦期にウクライナで開始されたネストル・マフノ（1888～1934）の農民革命運動の研究に取り組んでいる。これまでに2度ほどオンライン研究会で報告したが、今年度中には論文にまとめられそうだ。

なお、筆者が2018年度から参加してきた北東アジア地域研究（人間文化研究機構共同研究プロジェクト）もいよいよ最終年度である。その集大成となる論文集（年度内刊行予定）には、「朝鮮における〈アナキズム的近代—20世紀初頭の東アジアにおけるクロボトキン主義の拡散と『朝鮮革命宣言』』という論文を寄稿した。これは朝鮮の思想家、申采浩〔シン・チェホ〕（1880～1936）の暴力革命論について論じたものであるが、このプロジェクトに関わっていなければ、おそらく書こうと思わなかったテーマである。筆者の視野を広げてくれたことに対し、関係者の皆様に感謝申し上げる。

NEAR センター研究員 佐藤 壮

2020年度は以下の研究活動を行なった。

- 江口伸吾研究員(当時)が研究代表を務める科学研究費プロジェクト「現代中国の権威主義体制に関する総合的研究—ガバナンスの正統性をめぐって」に研究分担者として参加し、同研究会にて「『シャープ・パワー』言説の対中認識」と題する報告を行なった（2020年11月29日）。
- 北東アジア地域学術交流研究助成プロジェクト「朝鮮半島非核化プロジェクト」（研究代表：福原裕二研究員）のプロジェクト・メンバーとして、朝鮮半島の非核化に向けた動向をアメリカ外交の観点から検討し、「トランプ政権における北朝鮮非核化協議：『核態勢見直し』と国際制裁との関連から」と題する報告（2021年3月）にまとめた。
- 教育活動及び萌芽的研究活動として、隠岐郡海士町でのフィールドワークを実施した（2020年8月及び11月）。2020年度は、地域貢献推進奨励助成金プロジェクト「JICA・海士町ブータン青年研修への学生参画：コミュニティ防災と地域の危機対応力を探る」を実施し、海士町が実施するJICA（国際協力機構）のブータン青年研修員受入事業（コロナ禍のため最終的に延期）に参加するゼミ学生を引率し、国際交流と地域づくりの融合と相互作用を探り、学生に対する教育的効果

を検証することに努めた。

2021年度は、引き続き江口伸吾・南山大学教授の科研プロジェクトの研究分担者として、グローバル・ガバナンスに対する中国の関与を中心に検討を行う予定である。

NEAR センター研究員 豊田 知世

2021年度は、本格調査前のプレ調査や「予測」に対する勉強会、木質バイオマス利用による社会・環境・経済への影響、熱中症に関する研究など、勉強会や調査準備等に追われた。

- 1) 木質バイオマスの活用によって、地域に発生する目に見えない価値や効果を推計する複数のプロジェクト研究に参加しており、日本国内の木質バイオマスを活用している地域や、マレーシアのパーム畑を中心に、定量的な評価手法の開発を行った。国外については、実際に調査ができなかったため、先行研究を中心にデータを収集して、シミュレーションモデルを組み立てた。国内については、アンケート調査を実施し、定量評価を試みた。国内調査の成果は、取りまとめて環境情報科学に投稿した。
- 2) 「2020年度I-URICフロンティアコロキウム」勉強会では、「予測の価値をどう測るのか？サステナビリティ・レジリエンス分野での予測」に関する勉強会を半年開催した。予測は多くの学術分野で重要なトピックだが、予測の「価値」を議論する試みは少なかった。災害分野や気候変動、感染症リスクなど、予想がもつ価値や、予測によって行動する人とならない人の国際的な特徴の違いなどについて、他分野の研究員と勉強会を行った。
- 3) 熱中症に関する研究では、私たちの日常で熱中症リスクが高まっている認識は高まりつつあるが、なぜ人は行動しないのか、リスクに対するバイアス（自分だけは大丈夫、昔大丈夫だったので今年も平気、など）の視点から、熱中症対策が進まない原因を把握するためのアンケート調査を兵庫県の中学校で実施した。この結果をもって今年度はマレーシア、来年度はその他アジア地域で同様なアンケート調査を実施する予定で

ある。

4) 学生とのゼミ活動では、「地元学」を用いて、山口県阿武町の3つの地域で、地域資源マップを作成し、今後の地域づくりについて地元住民とディスカッションを行った。

新型コロナの影響によって、現地での調査ができにくい状況が続いている。実測データが必要になっているため、早めに調査を開始できることを祈っている。

NEAR センター研究員 濱田 泰弘

COVID-19の世界的感染拡大が始まり既に二年余となる。コロナ危機により我々大学人も「巣ごもり生活」を余儀なくされた。だがもともとドイツ語文献を講読する苦行を生業としてしまった私の修業生活には大きな影響はなかったが回顧しておきたい。

昨年度、ドイツとスイスに関する高レベル放射性廃棄物最終処分場立地選定法の研究論文を投稿し、日本国内の核のゴミの最終処分場の選定問題に関する共編著を執筆した。奇しくもそのわずか1月後、北海道^{すつちょう}寿都町及び^{かもえないむら}神恵内村が相次いで核のゴミ最終処分場立地選定の文献調査に応募する出来事が起きた。2006年高知県東洋町以降の核のゴミ処分場への立候補であった。両自治体では自治体内の審議でさしたる反対運動もなく、両自治体は国内初の「核のゴミ文献調査」に応募することが正式に決定された。しかしその後、トップダウン的に決定した首長に対する不満が燻り、特に寿都町では反対運動を起こす住民と推進側に間で対立が生じつつあり、コミュニティは分断の危機に瀕している。核関連施設誘致をめぐる自治体主導の拙速な意思決定、リスクコミュニケーションの不在が浮き彫りになった。

2021年6月初旬、北海道新聞社の記者から私のもとに突然取材の申し入れがあった。1時間ほどのZoom会議やその後の電話のやりとりを経て、特集記事の中で掲載された。そこでなされた「なぜ核のゴミ問題は地域の問題として収斂され、全国的な問題として共有されにくいのか」という記者の質問

が印象深く残った。それはそのまま私の学問の一つの課題として受け止めなければならないと感じている。自分の撒いた種に思わぬ形で反応があり、そこでの議論がまた自分の新しい問題を生み出した。自問自答のようでもあるが記者との会話を経て、無自覚な問題を自覚化させられる感があり、あらためて「人との対話」の重要性を強く感じた。コロナ禍ならではのZoom会議でもあった。

リスク関連施設における合意形成には、包括的参加と熟議を尽くすという手続が極めて重要であり、それが事後にコミュニティ分断の大きな問題となるのは多くの場合、関係人を絡めた合意形成手続が素通りされているためである。国内の原発関連施設をめぐる紛争は合意形成の不在に構造的要因があるのは明らかである。さらに原発関連施設はきわめて高度な専門的知見と放射線工学や土木工学、地質学、環境法等の幅広い領域に関する最新の知見が必要とされ、「素人にはわかりにくい」問題と言える。

このように学際的知識が問われるトランスサイエンスの問題に際しては結論を急がず、公衆においても隣接諸地域や、幅広い年齢層(特に若年層)、職業団体の関係者の包括的参加が原則とされる。専門家を交え熟議を尽くし、討議すること。そしてリスク関連施設に関する専門的知見を獲得し、自治体の公衆が主体的市民として討論に参加することによる学習機能効果(=lernfähig)にこそ熟議的民主主義の本質がある。そのためには結論を決めず、まず問題を共有することが肝要である。そのリスク関連施設の制度設計の一つのプロトタイプとなり得るものがドイツ高レベル放射性廃棄物最終処分場立地選定法改正法(13年制定、17年改正)であろう。

だが同法においては最終処分場、その候補地に選定された場合の土地所有権という基本権保護の問題が残されている。すなわち立地選定過程が進展し、実質的に決定された場合の土地の収用等の土地所有者、利害関係人の権利保護が十分保障されていないという問題が依然残されている。立地候

補に選定された後、さらに地層工事等が必要であるために稼働するまでには相当数の長い年月が予想される。候補地に選定された土地所有者の権利保護の問題はそれに関係している。

また国内で2021年6月に制定された「土地利用規制法」は実は上述の問題と関連している。同法は軍事施設さらに原子力関連施設を含む安全保障上重要な施設の土地利用に関する基本権の制限と利用の規制緩和を定めた法律であり、非常事態においては市民の基本権侵害につながる恐れが憂慮される。公的収用等にも規定があるが、軍事関連施設と原子力関連施設は安全保障上も同様に重要かつリスクの高い施設であること、情報機密度の高い「特別な施設」であることがあらためて確認された。その際の土地所有者の基本権が安全保障政策や原子力関連施設政策に比して軽視されること、土地所有者の基本権が侵害されかねないことが憂慮される。ドイツの立地選定法で憂慮した課題が日本で制定された「土地利用規制法」により目の前の課題となりつつある。

他方で、「夜店」であるはずのE・トレルチの一次大戦時の戦時評論の研究の方がむしろこの一年では主要なテーマとなりつつある。現在購読中の“Ulrich Platte, *Ethos Politik, von der ethischen Theorie zur politischen Konkretion in seiner Kriegspublizistik*, 1995, S.274.”は大変刺激的な書物であった。トレルチにおける政治倫理の問題、ルタートウムにおける内面世界と世俗的現実の分離、カルヴィニズムに係る「妥協=Kompromiß」について詳細に論じられている。著作の死去により挫折した「文化総合」はもとより、ドイツを代表するリベラル・プロテスタント神学者がなぜ第一次大戦を正当化し擁護する論説や講演に関与したのか。この30年来のわが問いに対する一つの手掛かりを得ることが出来れば一つの収穫と言えるであろう。

以上、大きく分けて上記二つの課題について時限を決めずゆっくりと研究している。他方で大学の役職の事情から時間の余裕が生じ久々に「研究者」らしい生活を送るこ

とが出来ており、その意味では日々の喜びと静かな充実感を感じている。2年来の宿題は片付いていないが、昨年執筆した共編著に関して早速メディアからの反応があったことが業績の一つの「収穫」と言えるかもしれない。

○研究業績

□論説

・「ドイツ高レベル放射性廃棄物最終処分場立地選定法における公衆参加に関する考察—スイスとの比較検証を通じて(二)」、『法研論集』(175号)早稲田大学大学院法学研究科、2020年9月、93-103頁。

□新聞記事掲載

・北海道新聞社、2021年6月23日、総合2頁、「核のごみどこへ 五つの論点 合意なき選定過程」(インタビュー記事掲載)。

NEAR センター研究員 福原 裕二

依然、コロナ禍による県境を跨いだ移動、海外渡航を制限する状況が続いている。昨年度の「回顧と展望」では、「今年度ほど辛い夏休み前の状況は迎えたことがなかったのではないかと記したが、その辛い状況はとうとう夏休み中どころか越年してしまい、未だ終わりが不透明である。海外調査ができるのはいつだろう。

さて、昨年度はそんな制約された状況ながらもいくつか対外的な研究活動を展開した。

○「Maritime Challenges within the Region」と題する研究報告(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター2020年度夏季国際シンポジウム、2020年7月2-3日、@オンライン)。

○「ポスト安倍時代の日韓関係の展望」と題する研究報告(2020広島韓国フォーラム「東アジアの平和と韓日関係の行方」、2020年10月16日、@広島リーガロイヤルホテル)。

○「石丸次郎『コロナ禍の北朝鮮～国内調査と非公開文書から探る』」のコメンテーター(早稲田祭学地域・地域間研究機構日米研究所主催の研究会、2020年11月28日、@大阪工業大学梅田OITタワー)。

続いて、研究成果の公表については以下のようなものである。

○「[書評論文] 濱田武士、佐々木貴文著『漁業と国境』」(『境界研究』No.11、2021年3月、85-94頁)。

○「朝鮮民主主義人民共和国の安全保障と非核化問題」(「“朝鮮半島の非核化”をめぐる学際的考察プロジェクト・ワーキングペーパー、2021年3月、2-35頁」[未刊行])。

けがの功名と言えそうだが、昨年度は慣れないオンライン授業に四苦八苦しながらも、夏季・冬季・春季休業期間には授業からも解放されて、NIHUの「北東アジア地域研究」、旧NEAR財団の「朝鮮半島の非核化」、科研の「北東アジアの国境漁業」のそれぞれプロジェクトに基づく研究成果(の一部)を原著論文にまとめる時間を取ることができた。この文章が日の目を見る頃には、それら研究成果を収めた2冊目の論文集が刊行されていることだろう(1冊目は、佐藤壮研究員との共著論文を収めた論文集がBRILLから刊行された。2冊目は、『北東アジアの地政治』と題して北大出版会より10月頃刊行予定)。

今年度は科研費による研究活動が最終年度を迎えるため、その追加的な調査やとりまとめが主課題となる。また、来年はアメリカG・W・ブッシュ元大統領が一般教書演説で「悪の枢軸」発言を行ってから20年(2002年1月29日)ということで、そこで名指しされたイランと朝鮮の「本当の姿」について検討する論考も準備する予定となっている。ワクチン接種の進行が人の移動制限の緩和に繋がることを期待しつつ、地道に研究活動を行う所存である。

NEARセンター研究員 **渡辺 圭**

私はロシアを研究フィールドにしている者であるが、昨年度は新型コロナウイルスのおかげでロシアに渡航することが出来なかった。国内に閉じ込められた状況下で、可能なことと言えば既存のロシア語文献をあたり、その中身を玩味することだけであった。かかる状況下で、外部から依頼があったのは、ロシアのヴィスシャヤ・シコーラ社が2002年に出版したイーゴリ・エヴラムピーエフ先生の手による『ロシア哲学史』

の翻訳であった。エヴラムピーエフ先生には直に対面したことがあり、同書のドストエーフスキイの箇所については、熱い議論を交わした。エヴラムピーエフ先生によれば、ドストエーフスキイの「死」についての解釈はロシアのキリスト教の正統なものではないという。

何とか『ロシア哲学史』を日本語のかたちにしようとしたのが当方の2020年度である。自分の担当箇所を閲するたびに、自身の哲学的な語彙力の拙さが分かり、その度に心を苛まれた。訳業はただ言葉を変換すれば良いというものではないので、エヴラムピーエフ先生の個々の言葉が持つ「含意」を汲み取ることに注意を払った。

エヴラムピーエフ先生の本の翻訳と並んで、筆者が取り組んだのは、『20世紀初頭のロシア正教会における讚名派駁論—静寂主義^{ヘシユカスム}の受容と神名解釈—』という論文である。この論文は、「主、イエスキリスト、罪深き我を憐れみたまえ」とのロシア正教会における伝統的な文言を反復する祈祷法を扱っている。静寂主義^{ヘシユカスム}とは、全き静寂の中で祈りの言葉に沈潜する祈祷法である。この論文の作成のため、これまでに渉獵した文献をあたり、「名前を付ける」という人間の認識行為が当時のロシア正教会でどのような解釈を与えられていたのか、その一端を照射することをこころがけた。この論文の作成は、エヴラムピーエフ先生の『ロシア哲学史』の訳業と並行している。なぜなら、ロシア人が「何を考えてきたか」という点で論点が一致しているからだ。エヴラムピーエフ先生は、イエス・キリストの復活の概念に対して現行のロシア正教会とは異なった解釈をしている。

当方は哲学と宗教学を専門としており、常に「考えることを考える」という営為を重視してきたが、2020年度は海外渡航が新型コロナウイルスのせいで困難になったため、内省を余儀なくされ、現在に至っている。これまでに集めた文献を熟読玩味し、日本のロシア研究に寄与させていただきたい、との思いで格闘しているのが筆者の現状である。

北東アジア最前線

NEAR センター研究員 福原 裕二

地域研究が地域研究者の占有物でなくなった、と言われるようになって久しい。その背景には、グローバル化によるヒト・モノ・カネや情報の容易な行き来がある。一見、国内事情や国際制裁の関係で、そうした容易な行き来を遮断しているように思われている朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）もまた、情報の流出入の面で例外ではない。未だ知る人ぞ知るといった状況だが、朝鮮がインターネット・サイトを通じて発信する情報は実にバラエティに富んでいる。そうした情報は誰でも容易にアクセスすることが可能で、それに触ればわか「朝鮮ウォッチャー」を気取ることもできよう。

とりわけ、現地との交流や現地調査が困難なコロナ禍の状況では、朝鮮発のインターネット情報の重要性がとて高まっている。かくいう筆者もまた、次のようなインターネット・サイトの確認を日課としている。まず、「労働新聞」のサイトでその日の重要記事（社説や論説など）と「公式文献」に新たな公報などが更新されていないかをチェックする。次に、「朝鮮中央通信」のサイトで「対外関係」記事や「国際消息」記事をざっと確認するとともに、「文献」欄で新たな談話が発表されていないかどうかをチェックする。いずれのサイトでも目につくものがあれば、右クリックして印刷を行っておく。最後に、「ウリ民族キリ」のサイトでは重要会議や現地指導・現地了解（朝鮮では、指導者＝金正恩委員長が現地を訪問して実状確認を施すことを「現地指導」と言い、その他内閣首相や最高人民会議常任委員会委員長などの高官が実状確認を施すことを「現地了解」と言う）などの画像や映像が記事に添付されていることが多いので、それらをチェックしたりダウンロードしたりする。また、このサイトでは前日の「革命活動消息」（指導者の動向）や朝鮮中央テレビの「20時報道」がアップ

されているので、その内容を確認したり、新たにアップされた図書・雑誌、画報・画集はないかチェックしたりする（これら出版物はPDFでダウンロードできることが多い。著作権には注意を払おう）。以上3つのサイトから発信されている情報には重複が多いものの、それぞれに固有な情報やより利用しやすい画像・映像が含まれており、併せてアクセスするのが望ましい。



「労働新聞」のサイト(2021年7月6日アクセス)

筆者の日課としてはその程度の閲覧であるが、下でサイト名やアドレスを紹介しているように、国家機関やメディア、教育機関、各種団体など、それぞれのサイトが発信している情報は限定的であるものの、大変多様で見応えがある。具体的などころは、「百聞は一見に如かず」ということで実際にアクセスしていただきたいが、朝鮮の政治・経済の動向に興味があれば新聞・通信社などのメディア関係のサイト、朝鮮が日本をはじめ対外的にどのような主張をしているのかに関心があれば「外務省」や通信社、各種団体関係のサイト、音楽や映画などの文化に関心があれば「朝鮮芸術」や「ウリ民族キリ」、その他の各文化関連サイト、旅行や景勝地などに関心があれば旅行・観光関連サイトを訪れればよいだろう。筆者などは個人的に古銭・切手収集が趣味なので、「朝鮮郵票」のサイトに釘付けである（中央銀行のサイトも開設されないかと密かに期待している）。「ホームページ総合案内」（広野）のサイトもあるので、まずはそれにアクセスして、関心あるサイトに飛ぶのもよいかもしれない。



「ホームページ総合案内」サイト(2021年7月6日アクセス)

このように、朝鮮発のインターネット情報は、ネット世代には物足りなさを感じさせるかもしれないが、朝鮮刊行物の獲得や情報収集に苦心してきた立場から言えば、大変有り難いものである。今や「資料・情報不足、朝鮮の内情が分からない」などと安易に口に出せない状況の到来なかもしれないし、朝鮮研究のアクセス手法・アプローチを再考する情報革命となるかもしれない。また、変化ということ言えば、かかる情報発信そのものが朝鮮の変化である。金正恩委員長の時代になり、国際試合における自国チームの敗北や対内的に都合が悪いとされる事実も公表するようになったと言われているが、そうした率直な変化を情報の流出入の変化とともに見逃すべきではない。日本では往々にして、折角の情報を自己に都合よく、理解したいように加工するクセが見られる。折角の情報がそのように加工されて流布するのを防ぎ、誰でも容易にアクセスできるようになった情報をどう的確に読み解いていくか、それが情報流通に伴って占有物でなくなった地域研究の現況における地域研究者と単なるウォッチャーとの分かれ目でないかと思われる。

■国家機関関係

- ・「外務省」(外務省): <http://www.mfa.gov.kp/kp/>
- ・「人民保健」(保健省): <http://www.moph.gov.kp/>
- ・「朝鮮体育」(体育省): <http://www.sdprk.org.kp/>
- ・「朝鮮芸術」(文化省): <http://www.korart.sca.kp/>
- ・「未来」(国家科学技術委員会): <http://www.mirae.aca.kp/>

・「金融情報局」(金融情報局):

<http://www.fia.law.kp/>

・「国家海事監督局」(国家海事監督局):

<http://www.ma.gov.kp/>

■メディア関係

・「労働新聞」(労働新聞社=朝鮮労働党機関紙):

<http://www.rodong.rep.kp/ko/>

・「民主朝鮮」(民主朝鮮社=最高人民会議常任委員会・内閣機関紙): <http://www.minzu.rep.kp/>

・「青年前衛」(青年前衛=社会主義愛国青年同盟機関紙): <http://www.youth.rep.kp/>

・「The Pyongyang Times」(平壤タイムズ):

<http://www.pyongyangtimes.com.kp/>

・「朝鮮中央通信」(朝鮮中央通信社):

<http://www.kcna.kp/>

・「民族大団結」(平壤放送):

<http://www.gnu.rep.kp/>

・「統一のメアリ(やまびこ)」(無所属民間放送): <http://www.tongilvoice.com/>

・「ネナラ(私の国)」(外国文出版社):

<http://www.naenara.com.kp/>

・「朝鮮の出版物」(外国文出版社):

<http://www.korean-books.com.kp/ko/>

■教育関係

・「金日成総合大学」(金日成総合大学):

<http://www.ryongnamsan.edu.kp/univ/>

・「金策工業総合大学」(金策工業総合大学):

<http://www.kut.edu.kp/>

・「ウリ(私たち)民族講堂」(金日成放送大学):

<https://ournation-school.com/>

・「ナムサン(南山)」(人民大学習堂):

<http://www.gpsh.edu.kp/>

・「主体」(朝鮮社会科学者協会):

<http://www.kass.org.kp/>

■旅行・観光関係

・「高麗航空」(高麗航空):

<http://www.airkoryo.com.kp/>

・「朝鮮観光」(国家観光総局):

<http://www.tourismdprk.gov.kp/home>

・「朝鮮国際旅行社」(朝鮮国際旅行社):

<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/1>

・「朝鮮国際テコンドー旅行代理店」:

<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/2>
・「朝鮮国際体育旅行社」(朝鮮国際体育旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/3>
・「平壤高麗国際旅行社」(平壤高麗国際旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/5>
・「朝鮮民族遺産国際旅行社」(朝鮮民族遺産
国際旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/6>
・「錦繡江山観光旅行社」(錦繡江山観光旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/7>
・「万景国際旅行社」(万景国際旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/8>
・「朝鮮国際青少年旅行社」(朝鮮国際青少年旅行社):
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/9>
・「三千里旅行社」(三千里旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/10>
・「黎明ゴルフ旅行社」(黎明ゴルフ旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/11>
・「高麗航空旅行社」(高麗航空旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/12>
・「緑陰亭国際旅行社」(緑陰亭国際旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/13>
・「白頭山旅行社」(白頭山旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/14>
・「妙香山旅行社」(妙香山旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/15>
・「七宝山旅行社」(旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/16>
・「元山旅行社」(元山旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/17>
・「羅先国際旅行社」(羅先国際旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/18>
・「満浦旅行社」(満浦旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/19>
・「豆満江観光社」(豆満江観光社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/20>
・「正方山旅行社」(正方山旅行社) :
<http://www.tourismdprk.gov.kp/agency/21>
・「金剛山」(朝鮮金剛山国際旅行社) :
<http://www.tour-kumgangsan.com/>

■各種団体関係

・「ウリ(私たち)民族キリ(同士)」(朝鮮平和
統一委員会) :
<http://www.uriminzokkiri.com/>

・「メアリ(やまびこ)」(アリラン協会) :
<http://www.arirangmeari.com/>
・「平壤国際文化交流会」(平壤国際文化交流会) :
<http://www.friend.com.kp/index.php/pices>
・「柳京」(朝鮮海外同胞援護委員会) :
<http://www.ryugyongclip.com/index.php>
・「黎明」(民族和解協議会) :
<http://www.ryomyong.com/>
・「朝鮮平和擁護全国民族委員会」(朝鮮平和
擁護全国民族委員会) :
[http://www.friend.com.kp/index.php/knpc
/view/2592](http://www.friend.com.kp/index.php/knpc/view/2592)
・「老人たちのために」(朝鮮年老者保護連盟) :
<http://www.korelcfund.org.kp/>
・「朝鮮緑色後援基金」(朝鮮緑色後援基金) :
<http://www.naenara.com.kp/sites/kgf/>
・「永生」(金日成・金正日基金) :
<http://www.naenara.com.kp/sites/kkf/>
・「未来のために」(朝鮮教育後援基金) :
<http://www.koredufund.org.kp/>
・「朝鮮民族遺産保護基金」(朝鮮民族遺産保護基金):
[http://www.naenara.com.kp/sites/national/
original/ko/](http://www.naenara.com.kp/sites/national/original/ko/)
・「朝鮮赤十字基金」(朝鮮赤十字基金) :
<http://www.friend.com.kp/index.php/krcf>
・「希望」(朝鮮障害者保護連盟中央委員会) :
<http://www.naenara.com.kp/sites/kfpd/>
・「ボツ(FRIEND、友達)」(不明) :
<http://www.friend.com.kp/>

■その他

・「朝鮮民主主義人民共和国ホームページ総合案
内《広野》」(柳京コンピューター編集社) :
<http://www.dprkportal.kp/>
・「朝鮮の声」(朝鮮の声編集部) :
[http://www.vok.rep.kp/index.php/home/
main/ko](http://www.vok.rep.kp/index.php/home/main/ko)
・「朝鮮の今日」(平壤牡丹峰編集社) :
<https://dprktoday.com/>
・「万物相」(永豊商業情報技術社) :
<http://www.manmulsang.com.kp/>
・「朝鮮料理」(朝鮮料理協会) :
[http://www.cooks.org.kp/kp/index.php/first
/index](http://www.cooks.org.kp/kp/index.php/first/index)
・「朝鮮の貿易」(朝鮮の貿易編集部) :

<http://www.kftrade.com.kp/?lang=kp>
・「朝鮮映画」(朝鮮映画輸出入社) :
<http://www.korfilm.com.kp/>
・「平壤国際音楽コンクール」(平壤国際音楽
コンクール組織委員会) :
<http://www.uriminzokkiri.com/jpivc/>
・「4月の春親善芸術祝典」(4月の春親善芸術祝典
組織委員会) :
<http://www.uriminzokkiri.com/asfaf/>
・「柳京」(柳京コンピューター編集社) :
<http://www.mediaryugyong.com.kp/>
・「平壤国際新技術経済情報交流社」(平壤国際
新技術経済情報交流社) :
[http://www.friend.com.kp/index.php/
piintec/view/2593](http://www.friend.com.kp/index.php/piintec/view/2593)
・「朝鮮民族保健総会社」(朝鮮民族保健総会社) :
<http://www.knic.com.kp/?kp>
・「北極星保険会社」(北極星保険会社) :
[http://www.naenara.com.kp/sites/pole
star/?lang=ko](http://www.naenara.com.kp/sites/polestar/?lang=ko)
・「ブルボラ」(サムファン知的支援情報交流社) :
<http://www.pulbora.edu.kp/>
・「平壤柳京食品」(平壤柳京食品) :
[http://www.naenara.com.kp/sites/
ryugyong/](http://www.naenara.com.kp/sites/ryugyong/)
・「ムジゲ(虹)」(ムジゲ仲介会社) :
<http://www.naenara.com.kp/sites/rainbow/>
・「未来」(未来再保険会社) :
<http://www.naenara.com.kp/sites/refuture/>
・「サムヘ(三海)保険会社」(サムヘ保険会社) :
<http://www.naenara.com.kp/sites/samhae/>
・「朝鮮郵票」(朝鮮切手社) :
<http://www.korstamp.com.kp/>

NEAR Recommends (自著を語る)

江口伸吾著『北東アジア学創成シリーズ第5巻
／現代中国の社会ガバナンス—政治統合の社会的
基盤をめぐって—』(国際書院、2021年3月)

NEARセンター客員研究員
南山大学外国語学部アジア学科

江口 伸吾

本書は、2013年の中国共産党第18期三中
全会で提起された「国家ガバナンス体系と
ガバナンス能力の現代化」における「社会
ガバナンス」に焦点をあて、社会主義市場
経済体制への移行に起因する国内社会のグ
ローバル化により流動化、多元化する現代
中国社会の政治統合の過程を考察した。と
くに所有権改革、都市の社区建設や農村の
村民自治、公民社会、協商民主、大衆路線
などの政治社会の変化をとりあげ、党・国
家主導による中国型の国民国家建設、それ
と表裏一体をなす権威主義体制の行方を検
討した。

中国におけるガバナンス(「治理」)への関
心の高まりは、中国が20世紀末から顕著と
なったグローバル化を積極的に導入したこ
とによりもたらされた国内社会の流動化、
多元化に起因する。すなわち、グローバ
ル化によって、中国においても社会的領域
における多様なアクターが活動を活発化させ、
従来の党・国家のトップ・ダウンによる社
会の「統治」「管理」だけでなく、党・国
家と社会が双方向的な対話、協力に基づい
て参画する「ガバナンス」による政治社会
統合が不可欠となった。この点において、
中国も、グローバル化の過程で「ガバメン
トからガバナンスへ」と移行する世界の主
要国家と共通する政治改革の課題を担った。

しかし、党・国家と社会の双方向的なガ
バナンスの再構築の試みは、社会的領域に
おける多様なアクターのガバナンスへの参
加を促した一方、必ずしも民主制度の強化
には結びつかなかった。たとえば、本書で
論じた「協商民主(Deliberative Democracy)」

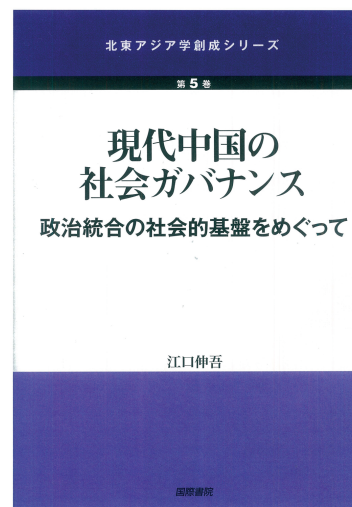
は、各レベルの政府における政策決定過程に多様なアクターの参画を求めた一方、その政策課題は限定されたばかりでなく、「権力授受」の過程である「選挙民主(Electoral Democracy)」とは切り離された。これは、協商民主が民主化を漸進的に促すというよりは、それを限定的に運用することにより、むしろ党・国家主導によるガバナンス能力を高める手段として機能したことを示す。

習近平指導部によって始められた「ガバナンス能力の現代化」は、民主化を回避しながら、党・国家と社会をつなぐ回路としてのガバナンスの能力の向上が図られたという点において、権威主義体制との親和性が強い。他方、ガバナンスという概念は、そもそもグローバル化に伴う社会的領域の活動の活発化とともに注目され、そのダイナミズムを体制内に組み入れる新しい論理として機能した。近年、習近平指導部は、改革開放以降の歴代指導部とは一線を画すように権力集中を進めている。それが「ガバナンス」を用いながら、従来の党・国家主導の「統治」「管理」への回帰を意味するならば、ガバナンスを必要とさせた社会変動の趨勢との間の矛盾を深刻化させ、その正統性が問われるという自家撞着に帰結してしまうのではなかろうか。

なお、本書は、北東アジア学創成シリーズ第5巻として刊行された。本書の一貫した通奏低音をなすグローバル化は、北東アジアにおいても多様なアクターの国境を越えた活動を活発化させた一方、それと並行するようにこの地域のナショナリズムも高まり、国家間の対立も深まった。また、近年、国際社会において権威主義の存在感が増し、その象徴として中国、ロシアがとりあげられ、北東アジアをめぐる問題はさらに複雑化した。本書では、社会ガバナンスの視点から現代中国の政治社会の変化を考察したが、今後は、これを一つの参照軸として、北東アジアの政治社会の比較考察につなげてまいりたい。

最後に、本書の刊行が、北東アジア地域研究センターの研究環境の恩恵に与ったことに心より感謝申し上げたい。筆者は、北東アジア学を提唱された宇野重昭先生のご

指導の下、2000年の本センター開設時から研究活動に携わるという稀有な機会をいただいた。この20年間を振り返ると、北東アジアは、その構成国の一つである中国の台頭とともに、アジアの一地域にとどまらず、今後の数十年間を見据えた中長期的な国際秩序の行方を洞察する上で、国際的な関心が最も多く注がれるまでに大きく変貌を遂げた。本書が、日本における北東アジア地域研究の国際的な知的拠点となることを目指して設立された本センターの発展に、微力ながらも貢献することができたのであれば望外の喜びとするところである。



NEAR短信 (2021年4月～2021年8月) 研究会活動

- 2021年度第1回NIHU・北東アジア研究会
【日時】2021年4月27日(火) 14:50～16:20
【場所】講義研究棟 会議室C
【内容】NIHU最終成果論集に向けての研究会
- 第59回日韓・日朝交流史研究会
【日時】2021年6月18日(金) 16:30～18:00
【場所】講義研究棟 大演習室1
【内容】宋修日(朝鮮大学校体育学部教授)
「日朝スポーツ交流の現場から考えること」
- 2021年度第2回NIHU・北東アジア研究会
【日時】2021年7月27日(火) 15:00～17:00
【場所】講義研究棟 大演習室1
【内容】西原和久(名古屋大学名誉教授、成城大学名誉教授)「沖縄と東アジア共同体論の展開—トランスナショナリズムの可能性を問う」

NEARセンター市民研究員の活動一覧

- 交流懇談の集い
【日時】2021年4月17日(土) 13:00～16:00
【場所】交流センター1階 研修室
【内容】挨拶／NEARセンターについての概要説明／NEARセンター研究員紹介／NEARセンター市民研究員制度説明／参加者の自己紹介／グループ・リサーチ・サロン／参加者同士の意見交換・マッチング
- 第1回市民研究員全体会
【日時】2021年5月15日(土) 13:00～16:00
【場所】講義研究棟1階 大講義室1
【内容】挨拶／NEARアカデミック・サロン：中村圭研究員「なぜ中国企業は人材の流出をプラスに変えられるのか」／参加者自己紹介／記念撮影／グループ・リサーチ・サ

ロン／共同研究の情報交換

- 第1回市民研究員研究会
【日時】2021年7月17日(土) 13:00～16:00
【場所】交流センター1階 研修室
【内容】挨拶／「大学院生と市民研究員の共同研究」審査結果発表と講評／NEARアカデミック・サロン：李暁東センター長「中国の法、西洋の法」／市民研究員研究報告：田中文也「記紀・風土記と魏志倭人伝等の整合性をはかる(第1報)」、高橋優子「被爆ナショナリズム」を問う—韓国・朝鮮人被爆者の運動を事例に一」、山崎京二「インバウンドとしての医療ツーリズム」

NEAR News 第60号

2021年9月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail: near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ: <https://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near/>